

ルール変更に伴う競技内容の分析

—全日本柔道選手権大会・全日本女子柔道選手権大会（2010・2011年）を対象として—

坂本 道人¹⁾, 前川 直也²⁾, 小澤 雄二³⁾, 佐藤 伸一郎⁴⁾, 横山 喬之⁵⁾,
中村 勇⁶⁾, 石井 孝法⁷⁾, 石川 美久⁸⁾, 生田 秀和⁹⁾, 林 弘典¹⁰⁾

The analysis of competition contents associated with rule changes — Aimed at All Japan Judo Championship and All Japan Women Judo Championship (2010・2011) —

Michito SAKAMOTO¹⁾, Naoya MAEKAWA²⁾, Yuji OZAWA³⁾, Shinichiro SATO⁴⁾,
Takayuki YOKOYAMA⁵⁾, Isamu NAKAMURA⁶⁾, Takanori ISHII⁷⁾, Yoshihisa ISHIKAWA⁸⁾,
Hidekazu SHODA⁹⁾, Hironori HAYASHI¹⁰⁾

Abstract

The purpose of this study was to clarify the differences of competition contents associated with rule changes aimed at All Japan Judo Championship and All Japan Women Judo Championship which were held in 2010 and 2011.

The investigation items were Winning point, Winning technique, Length of a game, Total number of penal rules and Relations of a weight difference and victory or defeat. As a result, differences in the competition contents associated with rule changes were not found in men. In regard to women, a game has been activated and the influence of the rule change was indicated. However, most of them, it seems to be due to the differences such as physical strength and technical level so that the result should not be worthy of note.

-
- 1) 福岡大学スポーツ科学部
Faculty of Sports and Health Science, Fukuoka University
 - 2) 国際武道大学
International Budo University
 - 3) 熊本大学
Kumamoto University
 - 4) 拓殖大学
Takushoku University
 - 5) 摂南大学
Setsunan University

- 6) 鹿屋体育大学
National Institute of Fitness and Sports in Kanoya
- 7) 了徳寺大学
Ryotokuji University
- 8) 大阪教育大学
Osaka Kyoiku University
- 9) 総合警備保障株式会社
Sohgo Security Services Co.,Ltd.
- 10) びわこ成蹊スポーツ大学
Biwako Seikei Sport College

I. 緒言

国際柔道連盟 (International Judo Federation、以下 IJF) は、1998 年の国際柔道連盟試合審判規定¹⁾ (以下、国際ルール) 改正において、積極的でない柔道に関する禁止事項 9 項目を「消極的柔道」^{注1)} と定義した。これに対して、積極的柔道は「ダイナミック柔道」とも呼ばれ、旗判定 (審判員 3 名の多数決による勝敗の決定方法)、罰則によらず、投技、固技の技術によって勝敗が決着することを意味する。日本では「一本を取る柔道」という表現が用いられている^{2) 3) 4)}。このように、IJF は柔道のダイナミック化を奨励²⁾³⁾⁴⁾することによって、柔道を観ている人にとって分かりやすく、おもしろく、興奮度を高める取り組みをしている。そして、柔道がオリンピック種目として発展し続けていくことを目指している^{5) 6)}。

2009 年まで日本国内では、競技を運営するにあたり、国際ルールと講道館柔道試合審判規定⁷⁾ (以下、国内ルール) の 2 つのルールが大会によって使い分けられていた。

国内ルールは、1900 年に作成された「講道館柔道乱捕試合審判規定」が改正され名称変更されたものである。世界の柔道が目まぐるしく変化する昨今、「本来の柔道を守るためにある」と、柔道の本質を守る最後の砦的な存在として位置づけられていた^{8) 9)}。一方、国際ルールは 1967 年に国内ルールが英訳されたものであり、内容もほぼ同じであった。しかし、体重別制の導入など柔道の国際化によって、国際ルールは頻繁に改正され、両ルールはしだいに乖離していった。そのため 2 つのルールを使い分けていた日本では、選手と審判員に混乱が大きくなり、ルールの一元化がささやかれるようになった^{10) 11)} (表 1)。そして、2010 年 5 月に日本国内のすべての大会は国際ルールで実施されるようになった¹²⁾。

日本人柔道家なら誰しも憧れ、体重無差別で競われる国内最高峰と位置づけられた大会、全日本柔道選手権大会 (以下、全日本男子) と皇后盃全日本女子柔道選手権大会 (以下、全日本女子) で

さえも国際ルールで実施された。国内大会における国際ルールの一元化について、国内ルールは体重無差別の大会における日本独自のルールである。一方、国際ルールは体重別制の大会における世界共通のルールである。体重無差別の大会を国際ルールで実施することは、体重の重い者が有利となるため試合の公平性が保てず、日本独自の柔道スタイルも壊すことにつながると指摘する声も多い^{18) 19)}。

三宅ら¹⁷⁾ は、全日本男子のルール変更の影響について、国際ルールが「ダイナミック柔道」の促進に一部寄与したという報告を行っている。しかし、この研究¹⁷⁾ は、ルール変更前の 3 大会と変更後の 3 大会のそれぞれ 3 年間のデータを合計して比較したものである。ルール変更直前と直後の大会を比較していないため、的確な影響が明らかにされていないものと考えられる。また、全日本女子については比較が行われておらず、全く影響が分からない状況である。

そこで本研究では、全日本男子と全日本女子について、ルール変更直前の 2010 年大会と直後の 2011 年大会を比較することによって、ルール変更が試合内容に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。男子については、先行研究と同様の影響がみられるのかを追証することに加え、単年度比較による新たな知見を得ることに焦点をあてた。

II. 方法

1. 対象

全日本男子については、国内ルールで実施された 2010 年大会 (36 試合) と国際ルールで実施された 2011 年大会 (39 試合) の計 75 試合を対象とした。全日本女子については、2010 年大会 (35 試合) と 2011 年大会 (35 試合) の計 70 試合を対象とした。

2. 分析項目

分析項目は、勝利ポイント、勝利獲得技、試

表 1 主なルールの相違点

時間(試合)	国内ルール 6分(男)・5分(女)	国際ルール 6分(男女)
時間(抑え込み)	一本:30秒, 技あり:25秒以上30秒未満 有効:20秒以上25秒未満	一本:25秒, 技あり:20秒以上25秒未満 有効:15秒以上20秒未満
場内外の関係	・場内外の判断は、立ち姿勢においては片足でも出たとき、捨身技においては半身以上、寝技においては、両試合者のいずれかの身体の一部でも立体的にみて場内にある場合(全身が出た場合)。	・場内外の判断は、どちらか一方の試合者が試合場内にあるときは続行し、両者が出たとき「待て」とする。寝技の場合は、立体的ではなく着地していることが条件。
罰則	・「指導」、「注意」、「警告」、「反則負け」(教育的指導は除く) ・「積極的戦意の欠如」→「教育的指導」 ・中程度の違反→「注意」(場外に出る行為)	・「指導」と「反則負け」の2種類
		・消極的な柔道に対する罰則の強化 ・攻撃、防御の中で、直接ズボン握った場合は、一回で「反則負け」。ただし、技をしっかりとかけた後、相手の技を1度受けた後、相手が片襟を持っている場合はズボンを握ることは認められる。

合時間、総罰則数、体重差と勝敗の関係の5項目とした。なお、講道館が発行する機関紙「柔道」の試合結果および全日本柔道連盟強化委員会科学研究部が撮影した試合映像を用いて分析項目の集計を行った。

(1) 勝利ポイント

勝利ポイントとは、最終的に勝敗を決定した得点とした。「一本勝ち」には「合せ技」「総合勝ち」を含めた。その他の得点による勝利については「優勢勝ち」「罰則勝ち」「判定勝ち」とした。

(2) 勝利獲得技

勝利ポイントで獲得した手段のこととし、投技(手技、腰技、足技、真捨身技、横捨身技)、固技(抑込技、絞技、関節技)に分類した。また、これらのポイント獲得手段について、技術によるものを「技ポイント」、罰則や判定によるものを「罰則・判定ポイント」と分類した。

(3) 試合時間

全日本男子については、3分以内に決着した試合を「前半」、3分01秒から試合終了直前までに決着した試合を「後半」と分類した。全日本女子については、試合時間が5分間であるため2分30秒以内に決着した試合を「前半」、2分31秒から試合終了直前までに決着した試合を「後半」と分類した。両大会とも試合終了まで行われたものについては「終了」とした。

(4) 総罰則数

試合中に審判員が選手に与えた総罰則数とした。

(5) 体重差と勝敗の関係

体重差と勝敗の関係は、本研究の対象は男女とも無差別で開催される大会であるため、全対戦での体重差を抽出し、2ルール間での特徴を分析した。勝者において、体重が重い方を「優位」、軽い方を「劣位」と定義した。

3. 統計処理

分析項目との関係を、クロス表を用いて χ^2 検定を用いて検討した。さらに5%水準の有意差が認められた場合、期待値と実際の頻度の差を検討する残差分析を行った。

総罰則数については、全日本男子、全日本女子のそれぞれの2010年と2011年を比較するために、比率の検定を用いて処理した。

Ⅲ. 結果および考察

1. 勝利ポイント

表2は両大会における勝利ポイントを示したものである。全日本男子では、「一本勝ち」は2010年大会41.7%、2011年大会46.2%であった。「優勢勝ち」は2010年大会16.7%、2011年大

会 17.9%であった。「罰則勝ち」は2010年大会 13.9%、2011年大会 25.6%であった。「判定勝ち」は2010年大会 27.8%、2011年大会 10.3%であった。いずれの項目においても、有意な関係は認められなかった。三宅ら¹⁷⁾の先行研究においても同様の結果であったが、グループ間の「一本勝ち」の割合に、10%以上の差が生じていることを受けて、僅かながら「ダイナミック柔道」が促進された可能性があるという見解を示している。

ルール変更により国際ルールが適用され、下半身への攻撃が制限、消極的な柔道に対する罰則が強化された。これに加え、体重無差別制ということも踏まえると、これまでよりも組み合う柔道が展開され、ポイントの増加が予測された。しかし、全日本男子においては、その影響をみることはできなかった。これについて二宮²⁰⁾は、2011年全日本男子の大会後、熱戦を振り返り「今回から国際柔道連盟試合審判規定に変更され、試合に変化があるのではないかと取り沙汰されたが、今の選手は国際ルールの試合が殆どであり戸惑いはなく、寧ろやり易かったのではなかったか」と述べている。つまり、全日本男子において試合のダイナミック化が確認できなかったことについては、選手が国際ルールに順応できていることが要因の一つとして考えられる。本研究における全日本男子については、「一本勝ち」やその他の項目に有意差が確認されなかったこと、「罰則勝ち」の増加率が「一本勝ち」の増加率を上回る結果であったことなどから、ルール変更による「ダイナミック柔道」の促進は確認できなかったといえよう。

次に全日本女子では、「一本勝ち」は2010年大会 42.9%、2011年大会 71.4%であった。「優勢勝ち」は2010年大会 8.6%、2011年大会 11.4%であった。「罰則勝ち」は2010年大会 25.7%、2011年大会 5.7%であった。「判定勝ち」は2010年大会 22.9%、2011年大会 8.6%であった。

「一本勝ち」において有意な増加 ($p<0.05$)、「罰則勝ち」で有意な減少 ($p<0.05$) がみられた。また、「判定勝ち」において、統計学的な有意差はみられなかったものの約 15%の減少がみられた。これらの結果から、全日本女子については、ルール変更の影響が強くあらわれ、試合がダイナミック化していると推察された。しかし、この一方で多田²¹⁾は、2011年全日本女子の結果を振り返り、「今年の皇后盃は、1回戦から決勝までの35試合中26試合で一本勝ちがでるなど例にない多さで、試合進行も最速であった。おかげで観衆を飽きさせないダイナミックな試合が展開され、大いに楽しむことができたのではないだろうか。しかし、裏を返すと一流選手の中でもこれだけ格差があったということを証明している。」と、今後の女子柔道に対する期待と、課題を述べている。つまり、女子柔道の選手層の薄さというものが要因の一つとして推察された。

2. 勝利獲得技

表3は勝利ポイントを獲得した技術について分類別に比較を行ったものである。全日本男子では、2010年大会手技 5.6%、腰技 2.8%、足技 36.1%、固技 11.1%、捨身技 2.8%であった。2011

表2 勝利ポイント

ポイント	全日本男子		全日本女子	
	2010年大会	2011年大会	2010年大会	2011年大会
一本勝ち	15(41.7)	18(46.2)	*15(42.9) ↓	*25(71.4) ↑
優勢勝ち	6(16.7)	7(17.9)	3(8.6)	4(11.4)
罰則勝ち	5(13.9)	10(25.6)	*9(25.7) ↑	*2(5.7) ↓
判定勝ち	10(27.8)	4(10.3)	8(22.9)	3(8.6)
不戦勝ち	0	0	0	1(2.9)
計	36(100)	39(100)	35(100)	35(100)

↑:有意に大, ↓:有意に小. *: $p<0.05$, 表記のないものは有意差なし

年全日本男子では、手技 15.4%、腰技 5.1%、足技 38.5%、抑込技 2.6%、捨身技 2.6% であった。すべての項目において、有意な関係は認められなかった。しかしながら、両大会で足技の施技頻度が最も高く、次いで手技という結果であった。

全日本女子において、2010 年大会については、手技 2.9%、腰技 5.7%、足技 20.0%、抑込技 11.4%、捨身技 11.4% であった。2011 年大会については、手技 2.9%、腰技 14.3%、足技 28.6%、抑込技 28.6%、捨身技 8.6% であった。女子についても、男子と同様にそれぞれの項目において有意な関係は認められなかった。しかしながら、2011 年大会においては、足技・固技が同数で最も多かった。特に固技については、その全てが抑込技であり、大会間で 17.2% の増加が確認できた。辻原ら²²⁾ や木村ら²³⁾ の研究によると、第 1 回全日本女子柔道選手権大会 (1986 年) では、決まり技の 75.9% が固技によるものであった。また、その中でも抑込技の占める割合が非常に高く、今後の女子柔道の競技力向上を図るために、固技、特に抑込技が重要なポイントを占めていると報告している。これについては、女子の体力特性が要因であるという見解が示されている。出口²⁴⁾ は、女子ジュニア選手に対するコーチングについて次のように述べている。「寝技の技術特性として、柔軟性や筋持久力の必要性が挙げられ、これはまさに男子よりも女子に優位な体力要素である。また、昨今のオリンピックを始め、世界選手権や各種大会の決まり技を分析した結果からも、特に女子選手においては、寝技で勝敗が決するケースの方が多いと報告されている。²⁴⁾」

日本の女子柔道は、第 1 回全日本女子以降、さまざまな面から強化が行なわれ、現在では、世界を牽引するまでになった。本研究における抑込技の決定率は、第 1 回大会ほどのものではなかったが、投技による決定率の増加による相対的な減少であると考えられる。男子と比較しても、女子の試合における抑込技の重要性と競技力向上・強化の関係には、現在もなお密接な関係があるといえよう。

また、男女に共通して足技が最も多く施技されていたことについては、試合が国際ルールで運営されるようになり、これまでよりも、消極的な柔道に対する罰則が厳しくなり、お互いに組み合う攻防が求められるようになったと推察される。お互いに組み合う攻防が増加すれば、施技する頻度は増加するかもしれないが、その一方で組み手による施技の妨害も受け易くなると考えられる。そのため、比較的組み手の制限を受け易いと考えられる腰技、手技に変化をみるができなかったのではないかと推察される。岡田²⁵⁾ は、足技は、相手が体格、体力で勝っていても、組み方が違っていても、組み方次第に仕掛けることができる。また、足技を使うことで戦局を有利にすると述べていることから、足技が試合を有利に進めていくために重要な技術であることが窺える。

投技・固技で決定したものを「技ポイント」、罰則・判定・不戦勝などを「罰則・判定ポイント」として分析を行なったところ全日本男子では、「技ポイント」2010 年大会 58.3%、2011 年大会 64.1%、「罰則・判定ポイント」2010 年大会 41.7%、2011 年大会 35.9% であった。すべての項目において、有意な関係は認められなかった。次に、全日本女子では、「技ポイント」2010 年大会 51.4%、2011 年大会 82.9%、「罰則・判定ポイント」2010 年大会 48.6%、2011 年大会 17.1% であった。分析の結果、有意な関係が認められ ($p < 0.05$)、「技ポイント」が 2010 年大会で有意に低く、2011 年大会で有意に高かった。「罰則・判定ポイント」においては、2010 年大会で有意に高く、2011 年大会で有意に低かった ($p < 0.05$) (図 1 参照)。全日本男子においては、先行研究¹⁷⁾ や勝利ポイントと同様、ルール変更による勝利獲得技への影響がなかったといえる。全日本女子については、先行研究で、女子柔道選手は、柔軟性など女性特有の身体的特性が決定力に大きな影響をもたらすことや、女子柔道選手全体の競技力に大きな差があることなどが問題視されてきた²⁶⁾。このように、女子柔道は、現在もなおさまざまな課題を抱えているが、少なくとも本研究においては、国際ルー

表 3 勝利獲得技

技名	全日本男子		全日本女子	
	2010年大会	2011年大会	2010年大会	2011年大会
手技	2(5.6)	6(15.4)	1(2.9)	1(2.9)
腰技	1(2.8)	2(5.1)	2(5.7)	5(14.3)
足技	13(36.1)	15(38.5)	7(20.0)	10(28.6)
捨身技	1(2.8)	1(2.6)	4(11.4)	3(8.6)
抑込技	4(11.1)	1(2.6)	4(11.4)	10(28.6)
罰則勝ち	5(13.9)	10(25.6)	9(25.7)	2(5.7)
判定勝ち	10(27.8)	4(10.3)	8(22.9)	3(8.6)
不戦勝ち	0	0	0	1(2.9)
計	36(100)	39(100)	35(100)	35(100)

↑:有意に大, ↓:有意に小. *:p<0.05, 表記のないものは有意差なし

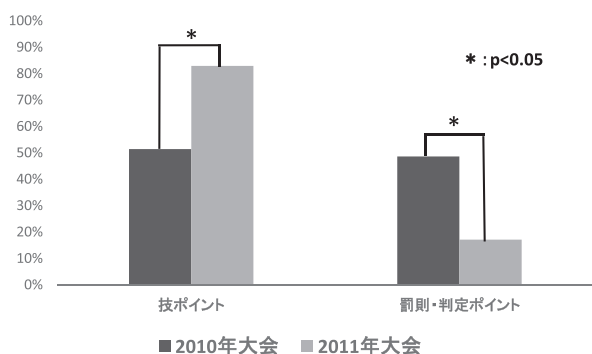


図 1 全日本女子勝利獲得方法の比較

ルの影響を受けていると考えられる。

3. 試合時間

表 4 は試合開始から勝敗が決定するまでの時間を示したものである。全日本男子においては、2010年大会「前半」22.2%、「後半」16.7%、「終了」61.1%、2011年大会「前半」17.9%、「後半」25.6%、「終了」56.4%であり、2ルール間（大会間）

で有意な関係を見ることはできなかった。全日本女子については、2010年大会「前半」25.7%、「後半」17.1%、「終了」57.1%、2011年大会「前半」44.1%、「後半」29.4%、「終了」26.5%であった。「終了」において、有意な関係が認められ、2010年大会で有意に高く、2011年大会で有意に低いことが明らかになった (p<0.05)。国際ルールは、1998年のルール改正において、消極的柔道に対する罰則強化を行った^{2) 3) 4)}。これにより、それまで選手間で戦術として用いられていた偽装的攻撃や変則的な組手に対する罰則が厳しく適用されるようになり、お互いに組み合わざるをえない時間が増え、これまで以上に試合が活性化されたものと考えられる。前述したが、もともと女子は、男子と比較した際に、パワーに劣り、投技による「一本」を得にくいと考えられてきた⁷⁾。消極的柔道に対する罰則が強化された現在の国際ルールで、しかも、体重無差別の大会ともなると、この女性特有の身体的特性が裏目となり、実力差や、試合自体の淡白感を露呈してしまったものと考えられる。

表 4 試合時間

時間	全日本男子		全日本女子	
	2010年大会	2011年大会	2010年大会	2011年大会
前半	8(22.2)	7(17.9)	9(25.7)	15(44.1)
後半	6(16.7)	10(25.6)	6(17.1)	10(29.4)
終了	22(61.1)	22(56.4)	*20(57.1) ↑	*9(26.5) ↓
計	36(100)	35(100)	35(100)	34(100)

↑:有意に大, ↓:有意に小. *:p<0.05, 表記のないものは有意差なし

4. 総罰則数

表5は試合中に審判員が選手に与えた全罰則をカウントしたものを示した。男女ともに両ルール間での比較を行なう際に、国内ルールにのみ存在した「教育的指導」は除いて分析を行った。また、国際ルールによって定められた積極的でないことに関する禁止事項「消極的柔道」、「その他」に分類し分析を行なった。全日本男子では、「消極的柔道」については、2010年大会37本(100%)、2011年大会59本(98.4%)であった。その内訳については、「積極的戦意の欠如」が、2010年大会25本(30.9%)、2011年大会44本(73.3%)であり、両大会間で有意な増加がみられた(p<0.001)。全日本女子では、「消極的柔道」は、2010年大会37本(94.4%)、2011年大会27本(90%)であった。その内訳については、「積極的戦意の欠如」が、2010年大会14本(20.6%)、2011年大会26本(86.7%)であり、こちらも両大会間で有意な増加がみられた(p<0.001)。また、全日本女子においては、同じく「消極的柔道」に関連する罰則の「偽装的攻撃」が、2010年大会3本(4.4%)、2011年大会0本(0%)であり、両ルール間で有意な減少がみられた(p<0.001)。

男女に共通して、審判員によって与えられた総罰則数の90%以上が「消極的柔道」に対して

与えられたものであった。そのなかでも「積極的戦意の欠如」がそれぞれ有意な増加を示した(p<0.05)。これは、IJFによるダイナミック柔道化の影響を受けたものと考えられる。つまり、今回のルール変更を受け、両大会の審判員が完全に国際ルールに感覚を切り替えて両大会をコントロールしていることが窺える。全日本女子の「偽装的攻撃」の有意な減少(p<0.05)については、ルールの変更により、教育的指導がなくなったことや「消極的柔道」に対する罰則が強化されたことを受け、選手は互いに組み合う攻防が強いられたと推察する。これによって、戦術の幅が狭まり、戦い方が単純化したことが要因ではないかと考えられる。

5. 体重差と勝敗の関係

体重差と勝敗の関係について(表6参照)、前述のとおり体重が重い方を「優位」、軽い方を「劣位」と定義した。

全日本男子においては、有意な関係はみられず、この項目においてもルール変更の影響を確認することはできなかった。

全日本女子では、2010年大会の国内ルールにおいて、31kg以上の体重差に有意な関係が認められ、「優位」が有意に高く、「劣位」が有意に低いことが明らかになった(p<0.05)。また、2011

表5 総罰則数

指導/大会		全日本男子		全日本女子	
		2010年大会	2011年大会	2010年大会	2011年大会
消極的柔道	積極的戦意の欠如	25(30.9)	44(73.3)***	14(20.6)	26(86.7)***
	偽装的攻撃	3(3.7)	1(1.6)	3(4.4)	0***
	故意に取り組まない	9(11.1)	10(16.7)	16(23.5)	0
	袖口を握る	0	1(1.6)	0	0
	極端な防御姿勢	0	2(3.3)	4(5.9)	1(3.3)
	指を組み合わす	0	1(1.6)	0	0
小計		37(100)	59(98.4)	37(94.4)	27(90.0)
その他	非標準的組み方	0	1(1.6)	1(2.8)	2(6.7)
	場外(出る/出す)	0	0	1(2.8)	1(3.3)
合計		37(100)	60(100)*	39(100)	30(100)

*:p<0.05, ***:p<0.001, 表記のないものは有意差なし

年大会の国際ルールにおいて、10 kg以下の体重差に有意な関係が認められ、「優位」が有意に低く、「劣位」が有意に高いことが明らかになった ($p<0.05$)。これらの結果については、現在の女子柔道の課題が如実に現われたのではないかと考えられる。ルール変更前（国内ルール）は、31 kg以上の体重差が女子柔道における勝利に影響を及ぼしているものと推察される。しかし、ルール変更後（国際ルール）は、その影響を及ぼしているとは言えなくなった。また、本研究における両ルール間での、勝利ポイントや勝利獲得技の項目で、明らかになった結果を鑑みれば、女子柔道においてしっかりと組み合う状態で柔道を行う上での課題が浮き彫りになったのではないかと考えられる。比較的個人戦の状況に近い体重差 10kg 圏内において「劣位」に有意な関係が認められたことから納得できる結果である。つまり、女子柔道選手は、無差別の大会における国際ルールに対して、上手く順応できていないのではないかと推察された。女性特有の身体的特性、つまり、筋力の弱さや、攻撃や防御などの技術の未熟さなどが要因として考えられる。

今後、これらの点が強化されてくれば、女子柔道においても「柔よく剛を制す」と表現される場面に多く遭遇できるものと期待される。いずれにしても、女子において現時点では、これまでと同様、体重幅が大きければ大きいほど、体重の重い

選手が勝利を収め易い傾向にあるといえる。

IV. 結語

本研究で男女それぞれにおいて以下のことが明らかになった。

1. 全日本男子

積極的柔道を強く推奨する国際ルールへの変更の影響からか、審判員が試合の活性化を促そうとする動きは確認できた。しかし、試合内容に関する全ての項目においてそれらの影響を確認することはできなかった。また、三宅ら¹⁷⁾の先行研究では、勝利ポイント「一本勝ち」で10%以上の増加傾向、「判定勝ち」においては有意な減少を示したが、単年比較の本研究では、同様の傾向はみられたものの、有意な差を確認することはできなかった。また、本研究の勝利ポイントにおける「罰則勝ち」は、「一本勝ち」を上回る増加を示していた。これは、前述した先行研究においても同様の結果であり、勝利方法の「技による得点」よりも「罰則による得点」の方が高い増加を示していた。さらには、10%近い増加を示したとされる「一本勝ち」には、この罰則による総合勝ちも含まれていることから、「一本勝ち」が純粋に増加したととらえることはいささか危険が伴うと推察した。

表 6 体重差と勝敗の関係

全日本男子						
	2010年大会			2011年大会		
	優位	劣位	小計	優位	劣位	小計
0~10	7(19.4%)	8(22.2%)	15(41.7%)	8(20.5%)	7(17.9%)	15(38.5%)
11~30	6(16.7%)	5(13.9%)	11(30.6%)	9(23.1%)	6(15.4%)	15(38.5%)
31~	6(16.7%)	4(11.1%)	10(27.8%)	4(10.3%)	5(12.8%)	9(23.1%)
合計	19(52.8)	17(47.2%)	36(100%)	21(53.8%)	18(46.2%)	39(100%)
↑:有意に大, ↓:有意に小. *:p<0.05, 表記のないものは有意差なし						
全日本女子						
	2010年大会			2011年大会		
	優位	劣位	小計	優位	劣位	小計
0~10	3(8.6%)	5(14.3%)	8(22.9%)	*3(8.6%) ↓	*10(28.6%) ↑	13(37.2%)
11~30	4(11.4%)	8(22.9%)	12(34.3%)	5(14.3%)	5(14.3%)	10(28.6%)
31~	*12(34.3%) ↑	*3(8.6%) ↓	15(42.9%)	8(22.9%)	4(11.4%)	12(34.3%)
合計	19(54.3%)	16(45.7%)	35(100%)	16(45.7%)	19(54.3%)	35(100%)
↑:有意に大, ↓:有意に小. *:p<0.05, 表記のないものは有意差なし						

以上のことから、本研究では、三宅ら¹⁷⁾の先行研究による知見「国際規定が全日本選手権における『ダイナミック柔道』の促進に一部寄与したことを示唆するものである。」について、現段階では、もう少し慎重に動向を見定めた方がよいのではないかと結論付けるに至った。

2. 全日本女子

本研究では、試合内容に関する全ての項目においてルール変更がもたらす有意な差が認められた。つまり、この度のルール変更により、試合内容が活性化したものといえる。しかし、その一方で、本研究の対象試合のほとんどが、選手の体力面や技術面などの格差によるものではないかといった見方も払拭できず、手放しでは喜べない結果であるといえる。つまり、全日本女子については、数値だけをみれば今回のルール変更により試合がダイナミック化したと考えられる。しかし、それ以上に、女子については、体重無差別の大会を国際ルールで行うことが妥当であるのかという点について疑問符を残した。今後も、無差別の大会と国際ルールの妥当性という観点での分析の必要性が示唆された。

3. 今後の課題

本研究では、男女とも新たな知見を得ることができた。しかし、本研究も含めて、これまでの研究ほとんどが、ルールから競技内容の最新動向を見たものである。これでは、大会の性質とその競技自体の本質を見失う可能性をおおいにはらんでいると考えられる。今後は、それが選手の戦い方にどう影響を与えているか、そこに無理が生じていないかなど、より詳細に分析を試みる必要があると考える。そして、得られた科学的な知見から、体重無差別の大会を国際ルールで運用することの是非を模索していく必要があるといえよう。

付記

本研究は福岡大学領域別研究部「身体運動フィードバック研究チーム(課題番号136008)」

の助成を受けて実施された。

注

- 1) 「消極的柔道」(negative judo)とは、IJFのルールに規定されている9項目の禁止事項の総称である。以下の行為が「指導」の罰則に該当する。
 - (1) 試合において、勝負を決しようとしないうちに、故意に取り組まないこと。
 - (2) 立ち姿勢において、極端な防御姿勢をとること(通常5秒を超えて)。
 - (3) 攻撃しているような印象を与えるが、明らかに相手を投げる意思のない攻撃を行うこと(偽装的攻撃)。
 - (4) 攻撃を始めること、攻撃を行うこと、相手の攻撃をかえすこと、また、相手の攻撃を防御することなしに、危険地帯に両足を完全につけて立っていること。
 - (5) 立ち姿勢において、相手の袖口を絞って握ること。
 - (6) 立ち姿勢において、勝負を避けるために、相手と片手または両手の指を組み合わず姿勢を続けること。
 - (7) 故意に、柔道衣を乱すこと、および主審の許可なしに、帯や下穿の紐をほどいたり、締め直したりすること。
 - (8) 寝技を始めるために相手を引き込むこと。
 - (9) 相手の袖口または、下穿の裾口に指を差し入れたり、相手の袖をねじり絞って持つこと。

文献

- 1) 全日本柔道連盟：国際柔道連盟試合審判規定2011，初版，2011.
- 2) 竹内善徳：IJF 審判委員会報告，柔道，68，(8)，49—51，1997.
- 3) 中村良三：IJF 理事会報告，柔道，70，(7)，51—55，1999.
- 4) 小俣幸嗣，尾形敬史，松井勲：詳解柔道ルールと審判法，17，大修館，初版，1999.
- 5) ジム・コジマ：柔道の国際的動向—審判法の

- 変遷, 柔道, 69, (3), 57—61, 1998.
- 6) 中村勇: 国際柔道の現在, ジュニア選手育成のための柔道コーチング論, 道和書院, 初版, 178—192, 2008.
 - 7) 松井勲: 講道館柔道試合審判規定, 詳解柔道のルールと審判法 2004 年度版, 大修館書店, 30—108, 初版, 2004.
 - 8) 嘉納行光: 柔道新聞, 日本柔道新聞社, 2009 年 1 月 1 日付 1 面, 1996.
 - 9) 柔道大辞典編集委員会: 柔道大辞典, アテネ書房, 150—151, 初版 1999.
 - 10) 小俣幸嗣・尾形敬史・松井勲: 詳解柔道ルールと審判法, 12—14, 大修館, 初版, 1999.
 - 11) 正木照夫: 柔道新聞, 日本柔道新聞社, 2009 年 1 月 20 日付 6 面, 1996.
 - 12) ベースボールマガジン社: 2009 年度 (平成 21 年度) 第 2 回全日本柔道連盟評議員会レポート: 国内大会も IJF 試合審判規定統一へ, 近代柔道, 32 (5), 48—49, 2010.
 - 13) 佐藤行那・川村禎三・竹内善徳・中村良三・堀内高綾: 第 1 回全日本女子柔道選手権大会の競技分析, 武道学研究, 12 (1), 98—100, 1980
 - 14) 野瀬清喜・辻原謙太郎・木村昌彦: 柔道競技における攻撃動作の競技分析的研究, 埼玉大学紀要教育学部 (教育科学Ⅱ), 38 (1), 117—127, 1989.
 - 15) 辻原謙太郎・野瀬清喜・木村昌彦・井浦吉彦: 柔道の競技分析的研究 - 男子と女子の競技内容の比較 -, 武道学研究, 20 (2), 197—198, 1987.
 - 16) 中村勇・田辺陽子・南條充寿・檜崎教子・重岡孝文: 1995～1999 年世界柔道選手権大会の競技内容の分析 - 勝利ポイントと勝利ポイント獲得技による比較 -, 武道学研究, 35 (1), 15—23, 2002.
 - 17) 三宅恵介・松井崇・佐藤武尊・横山喬之・竹澤稔裕・川端健司・秋本啓之: 全日本柔道選手権大会における国際柔道連盟試合審判規定の導入が競技内容に及ぼす影響, 武道学研究, 47 (1), 19—27, 2014.
 - 18) 高木長之助: 全日本柔道選手権大会熱戦を振り返って, 柔道, 81, (6), 30—32, 2010.
 - 19) 南公良: 全日本柔道選手権大会熱戦を振り返って, 柔道, 82, (6), 44—46, 2010.
 - 20) 二宮和弘: 全日本柔道選手権大会熱戦を振り返って, 柔道, 82, (6), 35—37, 2011.
 - 21) 多田功: 第 26 回全日本女子柔道選手権大会を終えて, 柔道, 82, (6), 68—69, 2011.
 - 22) 辻原謙太郎・野瀬清喜・木村昌彦・井浦吉彦: 柔道の競技分析的研究 - 男子と女子の競技内容の比較 -, 武道学研究, 20 (2) 197—198, 1987.
 - 23) 木村昌彦・辻原謙太郎・野瀬清喜・柳沢久・竹内善徳: 女子柔道の競技分析的研究 (その 1), 武道学研究, 20 (2), 193—194, 1987.
 - 24) 出口達也: 女子ジュニア選手に対するコーチング, ジュニア選手育成のための柔道コーチング, 柔道選手育成研究会編, 道和書院, 初版, 53—61, 2008.
 - 25) 岡田弘隆: 柔道足技を極める, ベースボールマガジン社, 4, 2012
 - 26) 佐藤温夏: 女子柔道の現在と未来, 近代柔道, 294, (12), 64—65, 2003.